

大河ドラマ雑感

新井 桂子

今年も、「お茶の水地理」近況・随筆欄の文章を書く時期がやってきた。ということは、一年も終わりに近いということである。小学生の頃は、一年がとても長く、時間の流れが止まっているようにも感じられ、中学生・高校生の頃も同じだった。それが、大学生になった頃から一年がどんどん短くなり、今では、仕事との関係で1月から3月はややゆっくり過ぎていくが、その後はあっという間である。しかし、今年は随分長かった。出産という「一大事業!？」を経験したせいだろうか。

さて、日常生活の中で、テレビは私たちに様々な情報を提供してくれる。毎週回を重ねて放送される番組はカレンダーの役割も果たしてくれる。私にとって、今年一年のカレンダーはNHK日曜夜8時の大河ドラマであった。これは、年間を通じて放送され、ドラマの進行とともに主人公が年齢を加えていくため、時間の流れを強く感じさせる。主人公の生涯が一年で完結するように制作されて、青年から壮年、そして老年へという人生の段階が、始まりの1月から終わりの12月へという月日の流れとよく対応している。

子供の頃からこの番組を見ていたが、その頃は、カレンダーがめくられていくことに対する寂しさなどは感じなかった。が、年を経るにつれて、その思いは強くなり、そのせいか一年を通じてこの番組を見ることもなくなっていたが、今年は久しぶりに大河ドラマにつきあった。「翔ぶがごとく」である。300年続いた江戸時代という旧体制から、明治という新しい時代が変わっていく時期に生きた人々を描いたドラマであった。誇張されている部分も多いのだろうが、新しい時代を造ろうとする人々の気迫や熱意に引きつけられた。また、古いものと新しいものの間で起こる葛藤の

深さを知らされた。今年は、東欧で政治の変革が続き、民衆のエネルギーを感じさせられた一年であったが、この時期の日本にも同じものがあったのではないだろうか。

この時期については日本史の時間に習う程度の知識しかなく、特に興味も持っていなかった。出来事も人物もともに数多く、教科書がゴシック体だらけだった印象がある。しかし、このドラマのように、西郷隆盛と大久保利通という二人の人物に焦点を当ててみると、幕末から明治維新を含む約30年が大変生き生きとしたものに感じられた。ドラマであるので、当然中心は人物なのであった。

では、二人を生んだ薩摩という土地はどのようなところだったのだろうか。番組の中では、桜島が二人を含めて薩摩に生きる人々の人生を見守る存在として象徴的に登場し、薩摩は、江戸や京都から遠く離れ、中世以来、この地を領していた島津氏が強い力をもって支配する土地として描かれていた。中央から遠く離れた土地であったがゆえに時代を変えるような人物が現れたのであろうか。

江戸時代は「土農工商」という身分制度に表されるように、士族が社会の中心として成立していた時代であった。それを自らの手で破壊し、新しい時代を築いたことになるが、その影響は大変に大きかったであろう。江戸から明治にかけての時代の変革を「近代化」とするならば、それによる影響は日本の中でも地域によって様々な違いがあったであろう。それをとらえることができればというのが、番組を見た後の感想であった。

この文章を書き終える今は、大河ドラマで中世を背景にした番組が放送されている。画面の暗さは、先の番組で描かれていた時代から500年も遡る時代の、統一や秩序などからは遠い生活を想像させる。